

平成二十一年度

和歌山信愛女子短期大学附属中学校

入学試験問題 前期日程

国語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～17ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

受験番号

【一】 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 誤った考えを改める。
- ② 生徒を率いて歩く。
- ③ 美術館で絵画を見る。
- ④ あの人はとても明朗な性格だ。

問二 次の——線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① さまざまなことにきょうみを持つ。
- ② 飛行機をそうじゆうする。
- ③ この場所は火気げんきんだ。
- ④ 父のためにマフラーをあむ。
- ⑤ この薬は頭痛にとてもよくきく。

問三 次の四字熟語には一字間違ちがいがあります。その漢字をぬき出し、正しく直しなさい。

- ① 意気当合 ② 絶対絶命 ③ 前第未聞 ④ 短刀直入

問四 次の——線部①～④と同じはたらきものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① お客さんが席を立たれる。

- ア 小学校時代が思い出される。
イ 先生は車で学校に行かれる。
ウ 電車の中で足を踏まれる。
エ ここからなら歩いて行かれる。

② 姉は今から仕事に行くそうだ。

- ア 明日はよい天気になりそうだ。
イ 母はとても悲しそうだ。
ウ 妹は今にも泣きそうだ。
エ あのゲームは楽しいそうだ。

③ 先生のように上手にピアノをひきたい。

- ア ドラマのような出来事が起こる。
イ この花は春に咲くようだ。
ウ 東京のような都会に住みたい。
エ 元気になってきたように思う。

④ わたしは国語がとても好きだ。

- ア 炭酸のジュースが飲みたい。
イ 野球も好きだがサッカーも好きだ。
ウ 昨日から降り出した雨がまだやまない。
エ 保母さんになるのが夢だ。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「料理」という語を『広辞苑』で引いてみると、「はかりおさめること」とある。多くの食材、調味料などの、経験、知恵に基づき最適の組み合わせ方を「はかり」、望ましいバランスをつくり出す「技」ということになる。それが転じて、「食物をこしらえる」という意味になったのである。食材が豊富になれば、当然のことながら

A

食材、調味料・香辛料を組み合わせ、「焼く」「煮る」「蒸す」「炒める」「発酵させる」などの調理法で処理すると、誰でもが「うまい」「かまずい」かは別にして理論上何十万種類もの料理をつくり出すことが可能だという。料理は模倣と創造の営みであり、九世紀のフランスの美食家ブリヤール・サヴァランが、「動物は餌を食う。人間は食べる。知性のある者だけが、食べ方を知っている」と述べているように料理はB的行為であり、美味は微妙なバランスのなかにある。

歴史をひもといてみると、美味を求める人間の欲望には驚くばかりであるが、欲望は今も増す一方である。I 古代エジプトでは水鳥の口に強制的に餌を注ぎこんでフォアグラがつくられており、バビロニアの富裕な人々はメス豚を使ってオス豚のフェロモンと同じ成分をもつトリュフを掘り出させ、古代ローマでは、カワカマスの肝、クジャクの脳、フラミンゴの舌などが珍味として食べられていた。① 欲望こそが味の創造の原点であり、食の世界を拡大する原動力だったといえる。考えてみれば、食材の組み合わせで想像することもできなかった味が生み出されるのは神秘的ですらある。

約五〇〇万年前に人類は東アフリカに姿を現し、長い歳月をかけて地球上にひろがっていった。人類史の九九・九パーセント以上を占める狩猟・採集時代には、② 自然そのものが人類の食料庫であった。風土に全面的に依存していたこの時期の食生活は、地域ごとにバラバラだった。どこに住むかで、すべてが決まったのである。

II 約一万年前に農耕・牧畜が出現すると、人類は、特定の穀物、獣肉、乳製品などを中心的に摂取することになる。安定して食料を得ることができるようになり、誰もが同じようなものを食べるようになった。③ 食の第一次革命」とみなされる。

つぎの転機が、一五〜一六世紀の「※大航海時代」である。「※新・旧両大陸」の間で食材の交換が行われて地球規模で生態系の変化が進み、人類の食文化が大きく変容した。「新・旧両大陸」の食材の交流と動植物の分布の大変動が「④食の第二次革命」である。「旧大陸」でトウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、トマトなどの栽培がひろがり、「新大陸」がヨーロッパの巨大な食料庫に姿を変える。

つぎの転機となったのが、「※産業革命」である。イギリスで産業革命（一七六〇年代）が起こると、都市が「工業生産の場」に変わり、地球規模での都市化が進んだ。自ら食料を生産できない都市住民に対する安定した食料の供給が、大問題になったのである。それができなければ、新しい社会システムは維持できない。都市に膨大な量の食材を運ぶための「交通革命」、腐敗防止技術の開発、食品加工の産業化が、並行して進んだ。世界の食材が集中するようになったヨーロッパ諸都市では美食が追求され、レストランも普及した。そうした変化が、「⑤食の第三次革命」である。

二〇世紀後半になると、「ハイテク革命」を背景にしてグローバル化（地球規模になること）が一挙に進む。食の世界でも、食品の低温処理技術、自動車の普及、船の大型化とコンテナ輸送方式とスーパーマーケットにみられるような大量販売の方法が結びついて「流通革命」が起こる。⑥グローバル化に食卓が組み込まれたのである。それが、「食の第四次革命」になる。一九世紀の食生活の変容を引き継ぎ、二〇世紀後半以降は加速度的にファースト・フード化が進んだ。ファースト・フードとは、店頭で注文してから短時間で手早く食べられる食事を指すが、食卓を通過する食品も、半完成品を解凍し、加熱するだけというように軽便化の道を歩んでいる。

考えてみればファースト・フードの歴史は古い。西暦七九九年のヴェスヴィオス火山の噴火で火山灰の下に埋まったローマ帝国の都市ポンペイには、すでに軽食や水でうすめたワインを出す店があったという。しかし、現在の食卓の大問題は、⑦食文化全般のファースト・フード化である。便利なことはよいことだが、商品として簡便化された食文化は、「液体のキャンデー」といわれる甘み過剰の清涼飲料水の※蔓延、少量でも高カロリーの食材の過剰摂取、栄養バランスのくずれなどによって、肥満の若年化や生活習慣病

の増加という新しい社会問題を生み出している。ハンバーガーやポテトチップ、ドーナツなどは、単に満腹感を目的とする食に過ぎないとして「ジャンク（がらくた）・フード」と呼ばれることがあり、清涼飲料水とともにその過剰摂取が危険視されている。

そうしたなかで、一九八六年にイタリアのピエモンテ州のブラという村から始まった^⑧スローフード運動が、短期間で世界にひろがった。「ファースト（早く・便利に）」を[※]スローガンに進行する食の画一化に対する警告がひろく受け入れられ、家庭の味、地域ごとの伝統的な食材と味、洗練された味覚、伝統的食材の生産などを守り、人類の歴史が育ててきた食文化を守る必要性が主張されている。

食卓を通過していく日々の料理と食材は、人類の歴史の再演といえる。たとえば、カキのオードブルを食べながら、紀元前一世紀のローマで行われた温水池でのカキの養殖^{しよく}を想像し、カキ料理用のオイスターフオークがつくられるようになった経緯^いを考え、カキにつけるケチャップからトマトと東南アジア起源のケチャップが結びつく過程を思い、インド北東部に起源をもつレモンがヨーロッパに伝えられた道筋を考えることができる。食卓上で再演される食の歩みを楽しむことは、スローフードにつながり、食の文化を取り戻す^{もど}ことにつながるのである。

（宮崎 正勝『知っておきたい食の世界史』より）

（注） ※大航海時代：ヨーロッパの国々がアメリカ大陸などに進出した時代。コロンブスのアメリカ大陸到達^{とく}などに始まった。

※新・旧両大陸：新大陸はヨーロッパの国々によって発見された大陸。主にアメリカやオーストラリアをさす。旧大陸はアメリカ大陸発見以前に知られていたアジア・アフリカ・ヨーロッパ大陸をさす。

※産業革命：小さな手工業の作業場に代わり、機械を設備した大工場によって大量生産が行われるようになったことから起こった社会・経済の変化。

※蔓延：よくないものの勢いがさかんになること。

※スローガン…ある運動の主張などを言い表した語。

問一 本文中の **I**、**II** にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ところが
- イ つまり
- ウ たとえば
- エ そこで

問二 **A** に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 料理はこしらえやすくなる
- イ 料理はおいしくなっていく
- ウ 料理の可能性も広がっていく
- エ 料理の手間が省ける
- オ 料理の栄養バランスはよくなっていく

問三 Bに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 学問 イ 文化 ウ 商業 エ 歴史 オ 本能

問四 ——線部①「欲望」とありますが、どのような欲望ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おいしいものを食べたいという欲望
イ たくさんのものを食べたいという欲望
ウ 高価なものを食べたいという欲望
エ 安全なものを食べたいという欲望
オ 健康によいものを食べたいという欲望

問五 ——線部②「自然そのものが人類の食料庫であった」とありますが、これはどういうことを言っているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人類と自然が共存し、環境破壊^{かん}などはありませんが、これはどういことを言っているのですか。
- イ 狩猟・採集した食料を保存する技術が自然にできていたということ
- ウ 当時は現在よりもずっと多くの食料を手に入れていたということ
- エ 作物を栽培^{さいばい}して、その時々^{しゅん}に旬^{しゅん}のものを得ていたということ
- オ 自分の住む地域で手に入るものだけを食べていたということ

問六 ——線部③「食の第一次革命」とはどのようなことですか。本文中の言葉を使って、六十字以内で説明しなさい。

問七 ——線部④「食の第二次革命」、——線部⑤「食の第三次革命」について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 新たな大陸の発見が、新たな食材の発見につながり、これまでの食文化はいったん破壊され、新たな食文化が作られた。
- イ 新たな輸送手段が発見されたことよって、ヨーロッパの諸都市には様々な食材が集中し、貧富の差が拡大した。
- ウ 海上移動の手段が確立し、これまで関係のなかった地域どうしが結びつき、食材の交流が行われるようになった。
- エ 地球規模での都市化が、農地の減少を引き起こしたため、世界各地から食材を運ぶ輸送技術が発達することになった。
- オ 「新・旧両大陸」間で動植物の交換が行われたため、ヨーロッパが巨大な食料庫に姿を変えることになった。
- カ 食料を生産できない都市にも大量の食料を供給することが可能になり、飲食店があちこちに広まった。

問八 ——線部⑥「グローバル化に食卓が組み込まれたのである」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 輸送・販売方法の発達により、世界中のものが食べられるようになったということ
- イ 大量生産・大量消費の世の中になり、世界規模で環境が破壊されつつあるということ
- ウ 様々な技術革新により、高価な食品を腐くさらせずに流通させることができるようになったこと
- エ 世界的に人口が増加したことにより、食料の流通手段を考えなければならなくなったこと
- オ スーパーマーケットの出現により、おいしいものが食べられるようになったこと

問九 ——線部⑦「食文化全般のファースト・フード化」とありますが、このことによってどのような問題が起こっているのですか。本文中から十五字でぬき出しなさい。

問十 ——線部⑧「スローフード運動」とありますが、これは何のために起こったのですか。「くため」に続くよう、本文中から六十字以内でぬき出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

【三】小学校二年生のテルは、家が学校に近いため、電車に乗ったことがなく、電車通学やバス通学の生徒がうらやましくてならなかった。ところがある日、電車で五つほど離れた駅から通っている吉田クンから火曜日の午後の誕生会に招かれ、テルのささやかな一人旅が準備される。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

母親はまるで息子を外国に手放すかのようだった。

① 吉田クンが待っているはずの向こうの駅の改札口まで送ってやろう、と何度

も何度もテルに言った。そのたびに、大丈夫だよ、一人で行けるよ、とテルは次第に大きくなる声で答えた。黒い革の小さな財布に白いコインと赤いコインを何枚かもらっていていれ、それをズボンのポケットの奥深くに押しこんだ。新しいハンカチとチリ紙を渡されて、テルはたった一人の短い旅に出た。家の前の道が、学校に通うときより白く広く感じられた。

「キップを落としちゃだめですよ」

「改札口をはいったら、すぐお財布にしまいなさいよ」

「なくしたら、もう駅から出られなくなるんだからね」

門の前に立った母親が伸び上がっては声をかけ続けた。

行きはなにこともなかった。というより、乗りこんだ電車の中で同じ吉田クンのうちを訪れる友だちにばったり会ってしまったので、テルの一人旅は家から駅のプラットホームまでしか続かなかったわけだ。テルにはそれが A。

電車で一人で乗りたいばかりに、彼は早く帰るように言われているからと吉田クンに嘘をついて、友だちを残したまま一足先に家に向かった。吉田クンの母親が、一人で大丈夫かしらと心配するのに、ぼくはどこへでも一人で行っているのですから、とテルは答えた。

行きとは逆のコースをたどって駅についた。自動販売機で子供のキップを買って改札口を通った。ピカピカ光る手すりにつかまっ

て階段をのぼった。ホームに降りるとすぐに下り電車が来た。あまり待つ時間がなくて物足りなかった。電車はすいていた。大きく

あけた窓から塊かたまりになった風がとびこんでテルを椅子いすの上に押し倒たおそうとした。負けるものか、と彼は風に顔を押しつけていった。すると、電車は飛行機になって線路すれすれの低空を飛行しはじめた。こうして、人気の少ない車両の中での単独行の楽しみをテルは十分に満喫まじすることができた。もうどこまでだつて一人で行ける、とテルは思った。降りる駅がすぐに近づいたのが物足りないほどだった。これではあまりにすぐ帰れてしまう……。

ところが、そうはならなかった。②テルが異変に気づいたのは、階段を降りて改札口の前まで来たときだった。囲いの中にこちらを向いて駅員が立っていた。彼がなにかを要求しているのがテルにはわかった。駅員が広げた両手の上に、人々は次々となにかを渡しては狭せまい通り道をすり抜ぬけた。テルはギョツとしてその場に足が凍こおりついた。どうしていいかわからなかった。誰だれもが当たり前の顔をしてその行事をくり返していた。テルにはそれができなかった。ポケットには財布しかはいつていなかった。財布にはお金しかはいつていなかった。なにもないポケットの底はふわふわと生温かいだけだった。

そのとき、駅員が銀色のハサミで改札口の囲いを激しく叩たたいた。

「もしもし、お客さん、秋葉原からの方！」

こたえるものがないと知ると駅員は急に声を張り上げた。改札口から遠ざかる人の動きに小さなざわめきが生まれた。次の瞬間、駅員の身体は軽々と改札口の囲いを跳とび越こえて外に走った。人々のざわめきが止まって音が消え、その中を一人の男が駆かけ抜けようとしてたちまち駅員に手首をとらえられた。大声のやりとりが二つ三つとびかい、それから急におとなしくなってしまう黒い服の男の腕うでをとつて駅員はもどつて来た。男の顔は奇妙きまうな赤い色に染まっていた。

「逃にげないから放せよ」

「あんたは知ってたわけでしょう」

「だからぼくは……」

激しく身体がもみ合うと、男は腕を振りもぎつて改札口の前からもう一度逃げようとした。今度は駅員の顔が真っ赤になり、男の

顔は青く変色していた。男は駅員に強くひかれて事務室の扉とびらに消えた。

キップを渡さないとしようとしたんだ、とテルは思った。まるで泥棒どろがつかまるときみたいだ、とテルは怯おびえた。そして突然、自分なぜそこに立っているかに彼は気がついた。男を事務室に連れていったあと、改札口は少しの間無人の状態になっていた。いま夢中で走り抜ければ逃げられるかもしれない、という考えがちらりとテルの小さな頭をかすめた。人のいない改札口の囲いの中から、赤い顔をした駅員が何人も何人も湧わき出しては襲おそいかかって来そうな恐れがたちまちテルをおさえつけた。駅員のいる改札口より、
③ 人影かげのないまま口を開いた改札口の方がよけいに気味悪く感じられた。逃げなくては、とテルは思った。彼は一目散に走った。改札口とは逆に階段を駆け上がり、いつかホームに立って苦しい息を吐はいていた。④ 母親の言葉がよみがえった。

ぼくはもう、ここから出られなくなったのかもしれない、とテルは考えた。出ようとすれば、必ずあの男のように改札口でつかまってしまうに違ちがいない。駅から出られなくなったときの逃げ方については、母親はなにも彼に教えてはくれなかった。

ホームにいる間はまだ安全なのだろうか。両親と出かけたとき、電車の中でキップを見せてほしい、と駅員がまわって来たことがあった。ホームではそんなことをしている人を見たことがない。平気な顔をして立っていれば、誰がキップを持ち、誰が持っていないかなどわかりはしないだろう。⑤ そう気がつくくと、テルは少し落ちて着いて売店のそばの水飲み場で水を飲んだ。ぬるい水がいやな薬いすの臭においをたてながら細くつまってしまったようなのを降りていく。

夕暮れが近づいて電車に乗り降りする人のふえたのにテルは気がついた。うっかり学校の先生などにみつかつては大変だという新しい心配に彼は向き合わねばならなかった。さらに遅おそくなれば会社から帰って来る父親に出会わないとも限らない。その前に、顔色を変えた母親が警察の人と一緒にさがしに来るかもしれない。隠かくれよう——テルはそう決心した。どうせここからもう出られないのなら、この中で一人でしつかり暮くらしていかなければならない。

刻々に増加し続ける人々を前にテルは焦あせった。あの階段から、ホームに滑すべりこんだ電車のドアから、夕刊を売る売店の陰かげから、いつ知った顔が現れるかわからない。周囲を見回すテルの目は、二つある階段の古い狭い方の昇のぼり口をとらえた。新階段と違って狭い

階段の側面は灰色ペンキのはげかけた板張りだった。ホームの一番端はしにあり、改札口からも離はなれているためにそちらの階段の利用者はあまり多くはなかった。人気をさけてテルは階段の裏手に回りこんだ。遠くに踏切ふみきりの見えるひっそりとした空間がそこにひろがっていた。

(黒井 千次『子供のいる駅』より)

問一 〜〜線部「母親はまるで息子を外国に手放すかのようにだった」において用いられている表現技法として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩ゆ
- イ 擬人法ぎ
- ウ 体言止め
- エ 隠喩いん
- オ 倒置法とう

問二 ——線部①「吉田クンが待っているはずの向こうの駅の改札口まで送ってやろう、と何度も何度もテルに言った」とありますが、このときの母の気持ちを漢字二字の熟語で答えなさい。

問三 本文中の A に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不思議だった

イ ここちよかった

ウ うれしかった

エ 残念だった

オ ありがたかった

問四 ———— 線部②「テルが異変に気づいた」とありますが、「異変」とはどのようなことですか。答えなさい。

問五 ——線部③「人影のないまま口を開いた改札口の方がよけいに気味悪く感じられた」とありますが、テルがどのように感じた理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 男をつかまえた駅員の表情が険しかったことが強く心に残り、何もやましい点のないテルまでも不安な気持ちにさせたから
- イ 改札口には誰もいないようだが、実はテルをつかまえようと駅員たちが隠^{かく}れているように感じられ不安になったから
- ウ 改札口に母親の姿がないことで、テルは果たして家まで一人で帰ることができるかという不安を感じていたから
- エ 改札口に駅員の姿がないことが、キップを誰に渡して駅から出たらいいかという不安な気持ちをテルに芽生えさせたから
- オ 人影のない改札口が、一人で不安なテルには何か大きな生き物の口のように見えて、吸いこまれてしまいそうだと感じたから

問六 ——線部④「母親の言葉」とありますが、それはどのようなことでしたか。三十字以内で説明しなさい。

問七 ——線部⑤「そう気がつく」とありますが、テルはどのようなことに気がついたのですか。三十字以内で説明しなさい。

問八 この文章についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 主人公テルの内面には直接ふれず、周囲の描写のみでテルの気持ちを表現している。
- イ 主人公テルと母の心の交流をしっかりと描くことで、親子愛を表現している。
- ウ 主人公テルの視点を通して描かれており、テルの気持ちをありのままに表現している。
- エ 主人公テルの母への裏切りを描くことで、テルのすきんだ内面を表現している。
- オ 主人公テルと駅員両方の視点から語ることにより、お互いの立場の違いを表現している。

【一】(30点)

問一 ① あやま った ② ひき いて ③ かいが ④ めいろう (各1点)

問二 ① 興味 ② 操縦 ③ 厳禁 ④ 編む ⑤ 効く

問三 ① 当 ↓ 投 ② 対 ↓ 体 ③ 第 ↓ 代 ④ 短 ↓ 単 (各2点) (各2点)

問四 ① イ ② エ ③ ウ ④ ア (各2点)

【二】(40点)

問一 I ウ II ア (各2点)

問二 ウ (3点) 問三 イ (2点) 問四 ア (3点) 問五 オ (3点)

問六

た	よ	農
と	う	耕
い	に	・
う	な	牧
こ	り	畜
と	、	が
。	誰	出
	も	現
	が	し
	同	、
	じ	安
	よ	定
	う	し
	な	て
	も	食
	の	料
	を	を
	食	得
	べ	る
	る	こ
	よ	と
	う	が
	に	で
	な	き
	っ	る

(5点)

問七 ④ ウ ⑤ カ (各4点) 問八 ア (4点)

問九 肥満の若年化や生活習慣病の増加 (4点)

問十 家庭の味、く文化を守るため (4点)

【三】(30点)

問一 ア (2点) 問二 不安 (心配など)(3点)

問三 エ (3点)

問四 キップをなくしてしまったこと。 (4点)

問五 イ (4点)

問六

い	キ
う	ッ
こ	プ
と	を
。	な
	く
	し
	た
	ら
	、
	駅
	か
	ら
	出
	ら
	れ
	な
	く
	な
	っ
	て
	し
	ま
	う
	と

(5点)

問七

い	ホ
う	ー
こ	ム
と	に
。	い
	れ
	ば
	キ
	ッ
	プ
	を
	持
	っ
	て
	い
	な
	い
	こ
	と
	が
	ば
	れ
	な
	い
	と

(5点)

問八 ウ (4点)

平成二十一年度

和歌山信愛女子短期大学附属中学校

入学試験問題 中期日程

国語

受験上の注意

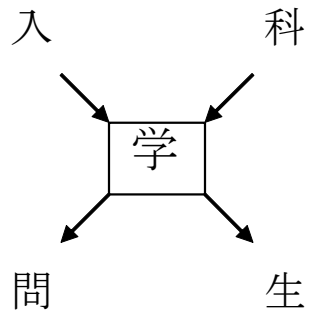
- 一 問題用紙は1～18ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

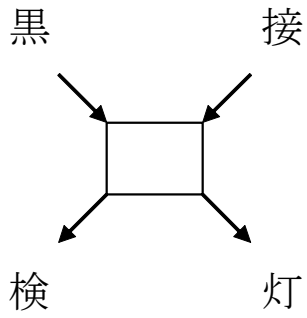
受験番号

問三 (例) にならって、□に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

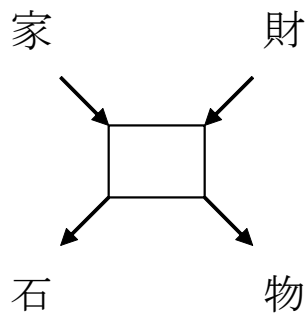
(例)



①



②



【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三年ほど前、長野県の伊南森林組合を訪ねたとき、役員の方が「昨年おもしろい青年が入ってきました」と、教えてくれたことがあった。山村生まれの青年でさえ加わってこない森林組合の作業班の仕事に、東京生まれの信州大学を出たばかりの青年が希望してきた。

その青年である高田さんと会ったのは、昨年の春のことである。その日は長野県駒ヶ根市近郊の森で、一歳若い児玉さんと組になってヒノキの苗を植えていた。児玉さんも高田さんの後を追うように山の現場で働きはじめた、大阪出身の、やはり信州大学出身の青年であった。伊南森林組合の作業班で働く同じ経歴の青年は、この二年の間に、すでに五人に増えていたのである。

1 その山で高田さんたちがすすめていた仕事は、きわめてめずらしい、というより私の知るかぎり前例がないような、おもしろい「人工林」づくりであった。元は三十年くらい前まで炭焼きに使われていた、ミズナラ中心の森である。これまでなら、森に生えていた天然の木をすべて伐採し、その跡地にヒノキを一斉に植林し、完全な単一樹種の森林をつくっていたことであろう。ところがそこでは、その天然の木を大胆に間引きして、その空いたところにヒノキの苗を植える方法がとられていた。これなら、二、三十年後には、天然の広葉樹とヒノキの混在するおもしろい森がつくられていくだろう。

「本当は何もヒノキを植えなくても、ミズナラの森として育てたほうがよいと思うのですが」
と高田さんは言った。私もこの意見に賛成である。家具材などに使うととても良い感じのするミズナラは、いまでは良材が少なくなって、北米産のホワイト・オーク（櫟の木）で代替しているくらいなのだから、ミズナラの森のほうが自然環境の面だけでなく、林業としての利益も大きいような気がする。

「それでも、自分たちのやりたかった林業に一步ふみこむことができた」

山の動植物を追いつめていくような、針葉樹の一斉林のみをつくる林業は、もう終わりにしなければならぬ。ところがそう考えたときむずかしいのは、理想の森とは何かということである。森はさまざまな生物の暮らす場所でもあり、人間たちが利用する

場所でもある。

その調和点を探しながら、森づくりをすすめるのが、これからの林業だと高田さんたちは考えている。だからミズナラを残しながらヒノキを植える方法は、まずまずの試みであった。

おそらく森林労働にたずさわる人々の半分は、将来は村の外から来た人々に変わるだろうと私は思っている。それは森づくりの仕事にはそれだけの魅力があるからである。 **A** 森林組合や森林所有者たちが戦後の古い林業方法をそのままにして、不足する労働力の補充^{じゅうりゅう}としてのみ都市出身の青年をみれば、たちまちこの新しい森林の担い手^{にん}たちを失うことになるだろう。

なぜならこの新³しい森の担い手たちは、単なる就職先を求めて山で働いているのではないからである。自分のつくりたい森があり、自分のつくりだしたい仕事がある。少なくともそのための模索^{さく}の場を求めて、かれらは森づくりに参加してくる。

一般論^{ぱんろん}としても、この数年、次のような新しい傾向^{けいけい}が生まれてきている。それは自分がその仕事につき、その仕事の内容を変えていくことによって、社会を変えていこうとする新しい社会参加のかたちである。 **B** 、自然保護の視点からこれまでの国の林業政策を批判するのが、旧来の方法だとすれば、新しいタイプの人々は自分が森づくりに参加し、ときに自分の仕事として参加することによって、森づくりそのものを変えていこうとする。このような方法が、森林問題にかぎらず、さまざまな分野で少しずつ広がってきているのである。

自然保護や環境問題への関心の高まりが、その背景にあることも確かであろう。だがそれだけではなく、 **C** 自分が一生かかわるに値^{あた}する仕事を探して、一部の人々の関心が森での労働にむかっているのである。

実際、森で働きはじめた新しい青年たちに出会うと、かれらは森の仕事には工夫^{くわう}しつづける余地があることと、自由な時間を確立⁴できるといふ二つの魅力⁴があると話してくる。その自由な時間には二つの意味がある。ひとつは森での労働には日没^{ぼつ}後の残業はありえないし、早くから計画しておけば、まとまった休暇^かをとることも可能である。 **D** 労働外の時間という意味で自由な時間をつくりだすことが容易なのである。

もうひとつ労働のなかでの時間の自由さといったものがある。それは仕事のなかの工夫する余地とも結びついていて、森のつく

り方を考えたり工夫したりしながら、一仕事終えたときの自由な感覚とでもいうようなものである。仕事を終えたとき疲れが残るだけなら、労働は生活のための労苦でしかない。だからこの自由な時間感覚とは、自分の仕事を自分の手でつくりだしていく自由さとともにあるのである。

そこでかれらは何十年も森とともに暮らし、森で働いてきた人々と一緒に仕事がしたいという。林業のマニュアルどおりに植栽や間伐をしていくだけなら、一般的なこれまでの労働と変わりはない。5 それでは森の労働は、賃金の安い過酷な労働ということだけになってしまう。

青年たちは、森のなかで、自分たちの豊かな労働をつくりだしたのである。そしてそのためには、さまざまな種類の森の木をたくみに利用し育てていった、村人の腕や知恵を共有したのである。労働を豊かなものにするには、森や木の価値も、その利用法も、育て方もよく知っていて、そのうえで自然に、自分の労働を工夫していけるようにならなければならない。だから、かれらは森の仕事の大先輩に教わりながら、仕事をしてみたい。

労働の自由とは、これまでは職業選択の自由にはほぼ限定されてきた。職業を選ぶところまでは自由であっても、就職してからは自由に仕事することは難しい。ところがいま人々が求めはじめているものは、生活を維持するためのだけの労働ではなく、労働自身⁶の豊かさであり自由さなのである。

そのような仕事のひとつとして、森で働くことが視野に収められはじめている。森の労働には、自分たちの力で、その仕事をどんどん自由なものに広げていく余地があると、青年たちは感じているのである。そしてそう感じる人々がいるかぎり、その自由さを拡大していけるように、森林組合や林業家が努力していけば、森で働くこうと考える青年たちは、これからも増えつづけていくだろう。なぜならかれらは都市での就職によっては得られない労働の性格を、森での労働のなかでつくりだそうとしているのだから。

(内山 節『森に通う道』より)

(注) ※マニュアル……仕事の手順

問一 線部 a、b と同じ働きのものをそれぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a

ア 電話がないから困った。
イ 今日の宿題は多くない。
ウ 何も言わないでね。
エ 君が泣くとせつないよ。

b

ア 大きな木に登る。
イ 今日はとてもさわやかだな。
ウ そんなことがあるものか。
エ この川はゆるやかな流れである。

問二

A 〃 D に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、二度同じ記号を使つてはいけません。

ア たとえば イ つまり ウ ただし エ むしろ

問三 線部 1 「その山で高田さんたちがすすめていた仕事は、〃 おもしろい『人工林』づくりであった」とありますが、「高田さんたち」はどのような考えで「おもしろい『人工林』づくり」をすすめていたのですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問四 ——線部2 「これまでなら」とありますが、「これまで」の林業はどのようなものでしたか。本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問五 ——線部3 「新しい森の担い手たち」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 新しい山の仕事のあり方を求めるために、国の旧来の林業政策を積極的に批判している人々
- イ 森林組合や森林所有者たちが求める、不足する労働力の補充じゅうりょうという役割を果たしている人々
- ウ 自分が積極的に森づくりにかかわることで、従来の森づくりのあり方を変えようとしている人々
- エ 新たに森の仕事にたずさわること、都市にはない確実な就職先を確保しようとしている人々
- オ 自然保護の立場を重視し、自然と共生してきた過去の林業の方法を受け継つぎようとしている人々

問六 ——線部4 「二つの魅力」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 森の仕事には、仕事の性質上、日没後の残業はありえないことと、まとまった休暇きゅうかをとることも可能だという二つの魅力があり、拘束時間こうさつじかんが長くきつい都市の仕事と比べ、自由で楽な仕事である。
- イ 森の仕事には、自分で自分の仕事内容を考えていく楽しさと、自分で時間の使い方を考えていく自由さという二つの魅力があり、この魅力は都市での労働の魅力と同じである。

ウ 森の仕事には、働き手が労働時間を設定できる自由と、仕事内容を自分で決めることができる自由という二つの魅力があり、束縛ぼくされることのない完全な労働の自由を保証している。

エ 森の仕事には、自分の仕事を自分で考えてつくりだしていくという魅力と、自由な時間を確立できるといふ二つの魅力があり、この二つが結びつき、労働における自由な感覚を生み出している。

オ 森の仕事には、時間的に自由に働けるという魅力と、労働から得られる収入が大きいという二つの魅力があり、今後、仕事を求める多くの若者たちをひきつけるであろうと予想される。

問七 —— 線部5 「一般的なこれまでの労働と変わりはない」とありますが、「これまで」の「一般的な労働」を筆者はどのような労働だと考えていますか。本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問八 —— 線部6 「労働自身の豊かさであり自由さ」とありますが、青年たちは、森の労働において「豊かさ」や「自由さ」を実現させるためにどうしなければならぬと考えていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ささまざまな種類の森の木を育ててきた村人の腕うでや知恵えを共有し、自分で労働を工夫くわうしていけるようにならねばならない。
- イ 森とともに暮らしてきた人々と一緒しよに仕事をすることで、マニュアルどおりに仕事ができるようにならねばならない。
- ウ 新しい森の担にい手たちと共に考え団結しながら仕事をしていくことで、自分の仕事を工夫できるようにならねばならない。
- エ 森を所有する森林組合や林業家と積極的に協力して、森に経済的な価値を見出す工夫いたをしていかなければならない。
- オ ささまざまな研究を通して森林での労働に技術革新を実現し、森の仕事をむだのないものにしていかなければならない。

問九 本文の内容と合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 天然の広葉樹と人間の植樹したヒノキが混ざって生えている状態は、森の生態系を考えると、あまりよいとは言えない。
- イ 森で働こうとする若者たちが徐々に増えていったことから、自然保護や環境問題への関心がより一層高まってきた。
- ウ これからの林業は、これまでのように森林所有者たちが中心になるのではなく、教養のある大学生たちが担うべきである。
- エ 森の動植物の生態系に気を配りながら森づくりをしていたら、林業としての利益を生み出していくことは不可能である。
- オ 高田さんをはじめとする若者たちが、自分たちの力で働く喜びを林業に見出そうとしていることは好ましい傾向である。

【三】僕（昇平）と草太と伸男は、自転車競技に夢中になっている青年です。自転車選手への夢がケガで断たれた草太は、その悲しみから、東京―日本海の三百キロ以上を自転車で走破するという無茶をしてみます。以下はそれに続く場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

結局、草太と連絡が取れたのは二日後だったが、電話の向こうの草太は意外に元気そうだった。長距離走の疲れなんて全く感じさせない声である。

僕と伸男は次の日からキャンプに行く予定だった。海まで走って砂浜にテントを張り、波の音を聞きながら眠るのだ。中学の卒業記念に行ったのが最初だったが、二十歳になった今では砂浜でおおっぴらに酒を飲むこともできる。

「なあ、草太も来いよ。朝から電車で来れば合流できるだろ」

「明日は、ちよつと大学に用事があるんだ」

「大学だって休みじゃないのか？」

「うちの学校、通信制の人たちのサマースクールがあるからね。休み中も図書館や事務局は開く日があるんだ」

「この暑い中でお勉強かあ？」

「からかい半分に尋ねたが、返ってきた答えにおどろかされた。草太は口ごもりながらも真面目な声で言ったのだ。」

※「司法試験のこと、調べておきたいんだ」

1「お前、司法試験なんて受けるのか？」

大学では法学部に属しており、昔から勉強もできるやつで一目おいていたけど、司法試験のことなんて初耳だった。自転車選手の夢をケガであきらめたとはいえ、弁護士や裁判官を目指すというのともんでもない話である。

草太としては、司法試験を受けるかどうか決めるにも、まずはいろいろ調べておきたいらしい。ただ声の中には決意の響きがあったし、草太の行動パターンからしてどんなに難しい試験であってもこつこつと勉強をして挑戦しそうに思えた。

「でも、なんだって司法試験なんだ？」

「どうせなら、A は高い方がいいと思つてさ」

八王子から日本海まで走った後で言われると妙にB があつた。道中には悪路も多く、自動車中心の道路環境のせいで危ない目にもあつたらしいが、そういう状況を改善するにも法律の知識は役に立つはずだという。

「せっかく法学部に通つてるんだから勉強できるときにしておいた方がいいし、司法試験つていう目標があればそれだけ張り合ひもあるだろ」

淡々とした声の中に、新しい冒険を見つけた喜びが隠れているようだった。僕だったら難しい試験があると思うだけで張り合ひよりはあきらめを感じてしまひそうだけど、草太には2 どん長距離走だつて完走できるという自信があるのだろう。

「……しかし、お前も極端だよな」

3 やっぱ草太はすごいと思つた。こんなに無茶なやつだつたつけどあきれてもいたけれど、僕まで元気を与えてもらったような気もしてくる。周りをこういう気分させてくれるというのが草太の人徳というものかもしれない。

「普通じゃないことをしたいっていうのは、あるかもね」

※ 受話器から、草太の静かな笑い声が聞こえてくる。その声を聞いた瞬間、僕はもしかしたらと思つたのだつた。

門外漢の僕でも、司法試験がものすごく難しいという話くらいは聞いたことがある。大学まで出た人でも落ちるのが普通らしいし、何年受けても合格できずにあきらめる人も多いというが、草太だったら話は別かもしれない。風が丘の登り坂や海までの道を征し、三百キロの距離を走破してしまうような男なら、どんな難関だつていつかは突破してしまひそうな気がした。

根拠にとぼしい思いこみかもしれないけれど、そう思つたのは僕だけじゃなかった。翌日の夜のテントの中で、仲男も似たようなことを考えていたのだ。缶ビールを飲みつつ一通りの事情を説明し、草太が合格するか賭けないかともちかけてみたら、平然と言ひ返してきたのである。

4 「賭けとして成立しないんじゃないの？ 僕は合格する方にしか賭けないよ」

「……なるほど」

5 僕だって草太が合格しない方には賭けたくない。そんな僕らの間では賭けをしたくても勝負にならないのである。

せまいテントに寝そべりながら、僕と伸男は自然と笑い出していた。何がおかしいのかよく分かってなかったけど、草太のとてもないチャレンジャーや、賭けができない自分たちのことを思うと笑いがこみ上げてくるのだ。テントに入ってくる海風を感じつつ、しばらく二人で笑っていた。

6 「でも、すげえよな」と僕は言った。何度言っても言い足りない気分だった。

「俺の場合、落ちこんだ時なんて自転車に乗りたいたいと思わなかったぜ」

酔って草太に愚痴ったり絡んだりしていたころの自分を思うと、自転車で走ったり勉強を始めたというパワーがあるというだけでも大したものだ。その前向きさがしゃくでもあるけれど、自分の夢が破れた痛手をそんな形で乗りこえようとしている草太には敬意を抱かずにいられない。

なにしろ三百キロで、ましてや司法試験なのだ。そんな真似ができるやつなど、草太のほかにはいやしないだろう。僕が同じことをやったとしても、どこかの山中で行き倒れになるのが落ちのような気がする。

7 しかし、そうつぶやいた僕に伸男が言い返してきた。

「そうとも言い切れないと思うよ」

妙にきつぱりとした言い方だった。もぞもぞと体を動かしながら、教壇にでも立っているような口調で語っていく。

「少なくとも、高校のときチームで百キロ走った時の昇平だったら、東京から日本海までの距離でも一日で走れたんじゃないか」
レースとちがって全力で飛ばさなくてもいいわけだし、きちんと休憩をとって回復をはかれば、原理的にかなりの距離を走れるらしい。日頃からきたえている者にとっては三百キロというのも決して無理な距離ではないとのことだった。

※ 「ツール・ド・フランスなんか、百キロや二百キロも走る日が一カ月近く続くんだよ。それに比べたら、自分のペースで一日だけ走る方が楽だって」

世界一過酷なレースに比べられても困ってしまうけれど、Cと言われるとそういうものかなと思えてくる。高校の時には途中で失格となった僕だって、勉強と自転車のどちらかを選べと言われたら迷わず自転車を選ぶことだろう。

草太の話を聞いた時、とても自分には無理だと思った。だけど二年前の僕には走れたというのなら、今だってなんとかなるかもしれない。ケガのせいでレースをあきらめた草太にできたのだから、ケガにも病気にも縁のない僕にできないはずはないのだ。

「——そうかなあ」だいたってからそう言った。返事がなかったところを見ると、伸男はすでに眠ってしまったのだろう。

僕はそのまま目を開けていた。海辺のテントで寝そべりながら、自分も草太のように大きなことをやってのけたいと考えていたのだ。

(竹内 真『自転車少年記』より)

(注) ※司法試験……弁護士や裁判官になるための難しい国家試験

※門外漢……その分野の専門家でない者

※ツール・ド・フランス……世界で最も有名な自転車レース

問一 〓線部①「おおっぴらに」、②「一目おいていた」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

①「おおっぴらに」

- ア あからさまに
イ 好きなかだけ
ウ むちやくちやに
エ 面倒どらうくさそうに
オ おどろくほどに

②「一目おいていた」

- ア ひと目みただけで、自分の好みだと感じていた
イ 自分よりすぐれた人と認め、敬意をはらっていた
ウ 隔へだたりなく、自分の身内のように扱あつかおうとしていた
エ 感謝しながらも、うまく表現できず悩なやんでいた
オ 尊敬して、相手の気に入るように努めていた

問二 ――線部1「お前、司法試験なんて受けんのか？」とありますが、この時の「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 長距離を自転車で走りぬいた草太を遊び半分でキャンプに誘ってみたものの、予想外の真面目な答えに、自分の軽率さを心から恥ずかしく思っている。

イ 長距離を自転車で走りぬいた草太の苦勞をねぎらうために気をつかいながらキャンプに誘ってみたものの、意外にも冷たく断られ、腹が立っている。

ウ 長距離を自転車で走りぬいた草太の行動を冷やかしつつキャンプに誘ってみたものの、日頃の行動パターンと全くちがう草太の言葉におどろいている。

エ 長距離を自転車で走りぬいた草太が気になりキャンプに誘ってみたものの、全く予想もしていなかった真剣な答えが返ってきたのでびっくりしている。

オ 長距離を自転車で走りぬいた草太をなぐさめるためにキャンプに誘ってみたものの、答えは意外にも冷たいものであり、草太との間に距離を感じている。

問三 A、Bに当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A Ⅱ (ア プライド イ 値段 ウ 鼻 エ ハードル オ 評判)

B Ⅱ (ア 発言力 イ 行動力 ウ 実行力 エ 理解力 オ 説得力)

問四 ——線部2 「どんな長距離走だつて完走できる」とありますが、「長距離走」を「完走する」とは、ここではどういうことですか。説明しなさい。

問五 ——線部3 「やっぱり草太はすごいと思った」とありますが、「僕」がこのように感じた理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 普通ならありえない選択を余裕を持って行う草太の様子を見て、以前と全くちがう彼の成長を強く感じたから
- イ 普通ならあきらめが先に立ちそうな目標に向かって、苦しんでいる草太の様子を見て感動してしまったから
- ウ 普通ならさけて通るであろう苦しい道のりを、あえて選ぼうとしている草太に深く共感してしまったから
- エ 普通なら選ばない目標について淡々と語る草太は、現実が見えていないのではと不安になってしまったから
- オ 普通ならしりごみしそうな目標に対して、喜びと自信を感じている草太の様子をすばらしいと感じたから

問六 ——線部4 「賭けとして成立しないんじゃないの？ 僕は合格する方にしか賭けないよ、——線部5 「僕だつて草太が合格しない方には賭けたくない」とありますが、この時の二人の気持ちを二十五字以内で説明しなさい。

問七 ——線部6 『でも、すげえよな』と僕は言った」とありますが、この時の「僕」の「草太」に対する気持ちの説明とし

て最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 草太とちがつて物事を簡単にあきらめきれなかった自分の過去をふり返り、草太に対して恥はずかしい気持ちでいっぱいになっっている気持ち

イ 新しく目標を見つけ、人生をもう一度充じゅう実したものにしようとしている草太の行動を手放しで喜び、自分も草太を見習いたいという気持ち

ウ その前向きな行動をねたましく感じながらも、自分の努力で心の痛手を乗りこえようとしている草太のことを尊敬せずにはいられない気持ち

エ とんでもないチャレンジをいとも簡単にやっつてのける草太を目まの当たりにし、自分も新しいことにチャレンジしてみたくなっている気持ち

オ 向こう見ずな草太のチャレンジのことを考えているうちに、ごく普通ふつの人生を送ってきた自分のことが、ばかばかしくなっている気持ち

問八

C

に当てはまる四字熟語を次の

の中から選び、漢字に直して答えなさい。

いしんでんしん

りろせいぜん

こうめいせいだい

いくどうおん

たんとうちよくにゆう

問九 ——線部7「そうつぶやいた僕」、——線部8『——そうかもなあ』だいぶたつてからそう言った」とありますが、

この間の「僕」の気持ちの変化を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 草太の話を聞き、自分にはとても草太のような行動はできないと感服していたが、昇平にだつてできるだろうという仲男の話を聞き、自分も何か大きなことをやってみたいと思うようになっていく。

イ 草太の話を聞き、自分の人間の小ささに絶望していたところに、仲男のなぐさめを得て自信を取りもどし、自分でも人をあつと言わせる大きなことをやってみようと思うようになっていく。

ウ 草太の話を聞き、自分も何かに挑戦してみたいとなく思ったが、草太のすごさを語り続ける仲男の話を聞き、自分も何とか大きなことを実現してみたいと強く思うようになっていく。

エ 草太の話を聞き、あまりの話の大きさに当初はぼう然とするばかりだったが、草太をほめちぎる仲男の話を聞き、自分も勉強して周囲の人をびつくりさせてみたいと思うようになっていく。

オ 草太の話を聞き、予想もしていなかった行動におそれるばかりだったが、自転車競技のすばらしさを熱く語る仲男に誘われ、自分も何か大きなことをやってみたいと思うようになっていく。

受験番号

【一】

問一	⑤	①
	⑥	②
	⑦	③
	⑧	④

問二	漢字	①	記号	漢字	②	記号	漢字	③	記号	漢字	④	記号	漢字	⑤	記号
----	----	---	----	----	---	----	----	---	----	----	---	----	----	---	----

【二】

問一	a
問二	A
	B
	C
	D

問三	問九
----	----

問四	問七	問五
----	----	----

【三】

問一	①
	②

問三	A
	B

問四	問八	問九
----	----	----

問五

問六

問七

--

【一】(28点)

問一	① 投票	② 消防署	③ 延びる	④ 展覧会
	⑤ 独奏	⑥ 街頭	⑦ いただき	⑧ ほうち
	(漢字 2点×6)	(読み 1点×2)		

問二	漢字 ① 紅	記号 -----	漢字 ② 黒	記号 -----	漢字 ③ 銀	記号 -----	漢字 ④ 金	記号 -----	漢字 ⑤ 青	記号 -----
	ウ		エ		オ		ア		イ	
	(1点×10)									

問三	① 点	② 宝
	(2点×2)	

【二】(40点)

問一	a ウ	b エ
	(2点×2)	

問二	A ウ	B ア	C エ	D イ
	(2点×4)			

問三
森はさまざまな生物が暮らす場所であり、また人間たちが利用する場所でもあるという。二つの立場の調和点を探そうという考え

問四	針 葉 樹 の 一 斉 林 の み を つ く る 林 業	問五	ウ
	(3点)		(3点)
問六	エ	問七	生 活 を 維 持 す る た め だ け の 労 働
	(4点)		(4点)
問八	ア	問九	オ
	(4点)		(4点)

【三】(32点)

問一	① ア	② イ
	(2点×2)	

問二	エ
	(3点)

問三	A エ	B オ
	(2点×2)	

問四
司法試験に合格すること

問五	オ
	(4点)

問六	草 太 な ら き っ と 司 法 試 験 に 合 格 で き る と 信 じ る 気 持 ち
	(4点)

問七	ウ	問八	理 路 整 然	問九	ア
	(4点)		(2点)		(4点)

平成二十一年度

和歌山信愛女子短期大学附属中学校

入学試験問題 後期日程

作文

受験上の注意

- 一 問題用紙の他に、解答用紙、下書き用紙があります。開始のチャイムが鳴ったら確認して始めて下さい。
- 二 受験番号は、すべての用紙に記入して下さい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙と下書き用紙をのばしたまま裏返して置いて下さい。

受験番号

問 次の文章を読んで、筆者の考えをまとめ、「人とのふれあい」について、あなたの考えを六百字以内で述べなさい。

冬から春先は、フナ（マブナ）釣りです。戦後一〇年ほどは、東京にもまだ池や沼、畑の間を流れる用水がたくさんあって、フナがよく釣れました。春休みには、早起きして「銀鱗号」という釣り専用列車に乗って、利根川の下流へも通いました。当時は「釣りはフナに始まってフナに終わる」といわれていました。季節ごとに魚が移動すること、魚がたくさん集まる場所の条件、食欲のあまりない魚にエサを食わせるコツなど、おとなたちにまじって竿を出すうちに、釣りという遊びのなんたるかを少しずつ覚えていきました。ひとつ、忘れられないエピソードを紹介しておきましょう。

まだ小学校低学年だったころ、早春の水辺で父と離れてひとりで釣っていたとき、大きなフナをつぎつぎと釣り上げ、おじさんを見つけました。すぐ近くに移動して竿を出そうとすると「こら、坊や、あっちへ行きな。おじさんはやっ」と釣れる場所を見つけたんだよ。坊やも魚がいる場所を自分で探しな。むかしから釣りは『盗んで覚えろ』って言うってな、おじさんがいま釣っている場所をよく見て、似たようなポイントを探すんだ。それは泥棒じゃない。でもな、おじさんが見つけた魚を坊やが釣るのは、泥棒と同じで恥ずかしいことなんだよ」と追い払われたのです。

「泥棒と同じ」という言葉は、心にぐさつと突きさりました。夕暮れ近く、ようやくフナの好ポイントを見つけて釣っていると「坊や、よかったな。自分だけの穴場を探すとうれしいだろ」という声。振り向くと、いつの間にか先ほどのこわいおじさんが後ろに立ち、笑って見ていました。

誤解のないようにちよつとひとこと。ここまでの話は、釣りのキャリアが長いことを自慢したり、「昔はよかった」と懐古にひたっているわけではありません。釣りは、魚がいそうな場所を探し出し、うまくハリに掛けることに心ときめかせる遊びです。基本的には、魚と一対一のゲームです。でも、釣りをとおしてたくさんの人と出会うこと、先輩釣り師たちから学ぶことも、釣りを楽しむ大事な要素です。人とのふれあいが釣りをいつそう楽しいものにしてくれるんですよ、ということをまず言っておきたかったです。

現在の情報化社会では、活字や映像、インターネットなどさまざまなメディアを通じて、釣りに関するあらゆる情報が簡単に手に入ります。しかし情報がこんにちほど豊かでなかった時代は、釣り場や釣り方などは、直接ひとに聞か、ひとの技を「盗むこと」つまり他人の釣りを見て学習すること、この二つのほかには上達方法がなかったのです。当時の釣り人は誰も、この二つの方法を駆使して、釣りの技術はもちろん、季節や時間に応じた魚のいそうな場所を探りながら歩き、魚の寄り場を覚ええました。私も、よく釣れる場所を見つけるよろこびを幼い日に知ったことで、魚種ごとに釣り場を開拓する楽しさを、こんにちまでもちつづけることができました。

他人の釣りをじっくり観察したり、じょうずな人から直接手ほどきを受けることが上達の早道であることは、いまもまったく変わっていません。最近の若い人を見てみると、メディアから流される情報を一方的に受け入れることに慣れてしまつて、人間どうしのコミュニケーションのとり方が、少しへたになつてるように思います。釣り師というものは本来、人に教えるのが大好きです。だから、わからないことがあったら、パソコンや携帯電話の液晶画面とにらめっこしていないで、釣り場に出かけ、じょうずそうな人に声をかけ、「すみません、初心者なので釣り方のコツを教えてください」と直接聞いてしまうことです。すると、聞かれもしないことまできつと親切に教えてくれるはずですよ。そのほうがよくわかり、仲間が広がり、釣りに行く楽しみもふえます。